様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６９２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５９３２５６

研究課題名（和文）看護基礎教育における模擬患者参加型教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of the Simutated Patient participatory educational program in basic nursing education

研究代表者
遠藤　順子（ENDO, Junko）

東京工科大学・医療保健学部・講師

研究者番号：５０４３３６１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,100,000円

研究成果の概要（和文）：看護教育における模擬患者(以下SP)参加型教育プログラム（以下プログラム）の開発を行った。第一に、学生・SP・教員に実態調査を行い、看護教育におけるSP活用の多様性を明らかにした。次に、その結果に基づきプログラムを試作し、SP活用における学生の経験と学習効果の関連を明らかにした。最後に、プログラムの主要な内容を決定し、教育実践、評価、検討を行った。結果、次の有用性が示唆された。(1) 学習動機付け、(2)看護者としての態度育成、(3)実施した看護援助についての考察。

研究成果の概要（英文）：I developed the Simulated Patient (SP) participatory educational program (program) in nursing education. First, I performed the survey to a student, SP, and a teacher, and clarified diversity of SP practical use in nursing education. Next, based on the result, I made the program as an experiment, and clarified a student's experience and the relation of a learning effect in SP practical use. Finally, I determined the main contents of the program and performed educational practice, evaluation, and examination. Result, the following usefulness were suggested : (1)learning motivation,(2) A nurse's attitude training ,(3).Reflection of nursing practice.

研究分野：看護教育学

キーワード：模擬患者　看護教育　教育プログラム

１．研究開始当初の背景

(1) 模擬患者(SP Simulated Patient,以下SPとする）参加型の教育方法は、1975年に日本に紹介され、医学、薬学、理学療法などの教育現場ですでに導入されている（藤崎,1993,松田ら,2005,沖田,1992）。看護教育においても2000年頃からSPを活用した教育の実践が報告されている。看護教育における看護基本技術の演習に SP を活用する理由として、患者への直接的経験なしには看護実践能力の育成は困難であるが、その力が未熟な段階にある学生が、他者と直接関わる中で看護技術を現実的に学ぶ方法としての有用性が報告されている（和住ら,2003）。しかし、現在の看護教育においては、SP活用の有用性は散見されるが、各教育機関で実施されているSP を活用した教育は試行錯誤の段階にあり、系統立てた教育プログラムの確立には至っていない。いずれの研究においても日本独自の看護教育における SP 活用の方法を模索することの必要性は述べられているが、具体的な活用内容は課題とされていた。また、SPを活用した教育効果を左右する要因として SP の質があげられている。しかし、現実には一定の専門機関による訓練を受けた SP を活用した報告は少数（4件/29件〔1999～2006〕）であり、また、その違いを検証した報告は現在まではない。SPの養成背景の違いによる教育の効果のメリット・デメリットはある（社本,2011）が、本学におけるSPの導入においては一定の専門機関において訓練を受けたSPの活用が可能である。そのため、本学における SP を活用した教育実践のデータは、SP本来の定義：「SP は、患者の持つあらゆる特徴、即ち単に病歴や身体所見にとどまらず、病人特有の態度や心理的、感情的側面に至る間を物理的に可能な限りを尽くして、完全に模倣するように訓練を受けた健康人」（植村,1998）に基づいているため、SP導入における教育効果を図る上での標準となり得る可能性が高い。したがって、SPを活用した教育方法構築の資料としての妥当性・信憑性は高いと考える。

(2)中央教育審議会において、学習意欲や目的意識の希薄な学生に対し、どのような刺激を与え、主体的に学ぼうとする姿勢や態度を持たせるかは、極めて重要な課題であり、教育方法の現状における課題として、教育内容以上に教育方法の改善の重要性が示されている（中央教育審議会：学士課程教育の構築に向けて（答申）2008年12月24日）観点からも、SPを活用した教育方法は十分に期待できる。先行研究結果からも、看護教育機関における SP を活用した教育効果は、学生の感情が揺さぶられ（和住ら,2003）、SP からのフィードバックが学生の気づきを高める（鈴木ら,2003）など学生の実際の反応としては十分に理解されるところである。しかし、SPの導入を単なる学習動機づけの一助としてではなく、今後は実際問題として国家試験に臨むための確実な知識面への反映や、看護の学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標の一部：①ヒューマンケアの基本に関する実践能力、②根拠に基づき看護を計画的に実践する能力の育成、といった教育の質の保証を担保した教育プログラムの構築が必要であると考えた。

２．研究の目的

(1)SP を活用した看護基礎教育方法の様相を把握する。

(2) SPを活用した教育方法の学習プログラムを構築する。

３．研究の方法

(1) SPを活用した看護基礎教育方法の様相把握：①過去12年間（1999年～2010年）の文献レビューにより、現在、日本の看護教育で

実践されている SP 参加型教育方法の特徴、効果、課題を抽出し、整理・検討する。②SP を活用した教育実践を行っている教育機関、SP 訓練機関における実態調査の実施。

(2) SP を活用した教育実践・評価：SP を活用した基礎看護技術演習および演習後の質問紙調査の実施・分析。

(3) SP 参加型教育プログラムの草案作成：先行研究のレビューおよびこれまでの教育実践の評価・分析から、SP 参加型教育プログラムの草案を作成。

(4) SP 参加型教育プログラムの開発：プログラム草案修正版に基づいた基礎看護技術演習を 1 年生と 2 年生に実施し、各演習後に質問紙調査を実施し、学習進度による学習効果の比較から、内容の有効性を検討する。

４．研究成果

(1) SP を活用した看護基礎教育方法の様相の把握：

①先行研究の文献レビュー結果から、SP 参加型教育方法の特徴としては、ⅰ．SP からのフィードバックが学生の気づきを高める(鈴木ら、2002)等の SP が作り出すリアリティによって生じる効果やⅱ．段階的、実践的学習の強化(本田ら,2009)、ⅲ．主体的な学習姿勢を引き出し、学習継続を動機付ける（和住,1999）効果がある。一方、課題としては、SP 活用における準備に時間を要し、費用負担が大きいこと、SP や教員の質の確保が難しい(本田ら,2009）ことが挙げられた。

②教員（84 教育機関〔73 大学、11 短期大学、不明 3〕の 87 名）を対象とした SP 活用の実態調査の結果、SP の活用状況は、SP の養成背景、活用回数および時間、演習内容等において各教育機関において様々な実践が行われていることが明らかになった。また、SP 活用時の留意点である「患者設定」は、同時に最大の課題でもあり、シナリオ作成を含む演習プログラムの計画においては、学習目標やファシリテーターとしての役割の明確化が重要である。看護演習では、活用可能な SP の人数が課題であり、看護師役体験の有無による学生の学習格差を最少とする工夫が演習プログラム上不可欠となる。現在は、試行錯誤による SP を活用した教育状況であることから、今後は一定の教育効果を担保する学習内容の抽出および教育プログラム構築の必要性が示唆された。以上から、ⅰ.SP を活用した教育実践は様々であり、各教育機関において試行錯誤の状況にある。ⅱ． SP を活用した看護教育において、一定の学習効果を担保する教育プログラム構築の必要性が示唆された。

③SP（119 名）を対象とした SP 活用の実態調査の結果、看護教育において活動している SP の養成背景、教育内容、活動状況は各教育機関によって多様であることが明らかになった。また、SP は活動上、「学生へのフィードバック」に最も困難を感じているが、教員の SP に対する「学習目標の明確化」や「十分な説明・打ち合わせ」等の不足がそれを助長する要因となっていた。「生きた学習教材」である SP はその存在自体にインパクトがあり、SP のフィードバックは学習効果を左右する絶対的な要素である。このため、SP 活用においては、SP の質の担保に努めることが重要である。SP の教育効果を最大限に発揮するためにも SP の長所・短所を考慮するとともに、SP 自身が達成感を得られる要素を含めた教育プログラム構築の必要性が示唆された。以上からⅰ.看護教育において活動している SP の養成背景、教育内容、活動内容は各教育機関において多様であることが明らかになった。ⅱ. SP を活用した学習効果の一定の質を担保する為に「生きた学習教材」である SP の特徴を考慮した学習プログラム構築の必要

性が示唆された。
④学生（8 教育機関〔7 大学、1 短期大学〕の 624 名）を対象とした SP 活用の実態調査の結果、ⅰ．SP 自体のインパクトやそのリアリティから、SP からのフィードックが学生に与える影響は大きい。ⅱ．SP なしでは気づけない患者の気持ちや援助に対する感想またはお礼の言葉は学生の学習意欲を喚起する。ⅲ．普段と異なる学習環境における「適度な緊張感」は、学生の集中力を増し、学習効果を高めると考える。しかし、「過度な緊張感」は、学習効果のみならず学習意欲にもマイナスに影響する。「過度な緊張感」は学生の高い自己意識や評価に対する過剰反応も要因であると考えられる。以上から、SP の持つ特徴が学習効果として最大限に反映され予測しうる問題を最小限に止めるために、SP を活用した教育はその内容は勿論、実施前のオリエンテーション、実施後のフォローアップを含めたプログラム構築の必要性が示唆された。

(2) SP を活用した教育実践・評価：SP を活用した口腔ケア演習における学生の学習経験と学習効果との関連を明らかにした結果、①SP への看護師役経験のない学生は、SP に援助するプレッシャーがない分、客観的に事実を捉え、柔軟に SP と関わることができるため新たな視点を得ることや、学習動機を強めることが示唆された。一方、看護師役体験のある学生は、学びの充実感よりも、失敗できない緊張と直接的な責任感が勝り否定的な感情を生じやすいと考える。②学生が行った援助をその直後に直接確認できるという学習経験は、SP のリアリティからも多くの学習効果に関連することが明らかになった。これは、SP を活用した教育におけるフィードバックの重要性、SP と学生とのリフレクションの必要性を支持した。

(3) SP 参加型教育プログラムの草案作成：先行研究のレビューおよびこれまでの教育実践の評価・分析から、SP を活用した教育プログラムの 11 の主要要素（①SP・学生・教員に対するオリエンテーション、②学生同士による演習、③SP 活用演習前の課題の提示・グループ学習、④演習時の反復学習、⑤演習時のディスカッション、⑥演習時のグループにおける役割の明確化、⑦SP のフィードバック、⑧演習後のリフレクション、⑨SP・学生・教員に対する SP 活用演習のフィードバック、⑩問題発生時のフォローアップ、⑪教育効果の確認）を抽出した。教育プログムの看護技術演習展開は表 1 の通りである。

表1　「口腔ケア演習」プログラムのポイント

① 事前にSP事例を提示し,各グループで援助方法を立案する.
・両上肢の機能障害により,自分で口腔の清潔が保持できない患者
・70歳代　・男性 / 女性　・和式寝衣を着用
・骨折の疼痛はなし
・口を大きく開けることに遠慮がある
・意思の疎通は問題なし
・安静度制限はなし

② 各グループの看護師役は,当日決定する.

③ 各グループは,SPへ2回援助を実施する.
1回目と2回目の看護師役はそれぞれ別の学生が実施する.

④ 1回目の援助後,学生間でカンファレンスを行い,改善点を検討する.

⑤ 改善した方法に基づき,2回目の援助を実施する.

⑥ 観察者役の学生は,1,2回目とも観察の視点に基づき見学 する.
・看護師役学生の援助の良い点,改善点
・SPの身体的・精神的な安全・ 安楽
・看護師役－SPの関係,等

⑦ 2回目の援助後,SPと学生との合同カンファレンスを実施し,SPより
フィードバックを受ける.

(4)SP 参加型教育プログラムの開発：プログラム内容の有用性を 1 年生・2 年生を対象に検討した結果、①SP 活用の「主体的な学習の必要性」、「患者との良い関係を築くコミュニケーションの必要性」、「看護師の身だしなみ・言葉遣いの大切さ」などの学習効果は 1,2 年生ともにほぼ全項目において 5 点満点の平均 4 点台であった。また、同じプログラムを 1, 2 年生に実施した結果、学習進度による学習効果の差は認められなかった。これらは、学習動機づけ、援助についての考察、看護師としての態度育成に関して SP の活用が効果的であることを示した。②SP 活用の学習効果

の多くは相乗的な効果を示した。また、SP 演習における肯定的な体験が学習意欲を喚起することが明らかになった。1 年生がより相乗的な学習効果を示す要因としては、学習経験の浅い 1 年生にとって SP の存在そのもののインパクトによる効果が大きく影響したものと考える。以上から、SP 参加型教育プログラムの学習動機付け、看護者としての態度育成、実施した援助についての考察に関する有用性が示唆された。

＜引用文献＞

① 藤崎和彦、アメリカの医学教育における模擬患者の導入の現状とその理論、看護展望、18 巻 8 号、1993、44-48

② 松田裕子、八木敬子、平井みどり、神戸薬科大学における模擬患者の養成と実習への導入、医療薬学、31 巻 2 号、2005、125-135

③ 沖田一彦、宮本省三、板場英行、他、理学療法教育へのシミュレーションの導入－模擬患者を用いたインテーク面接の実習について、理学療法学、19 巻 1 号、1992、18-24

④ 和住淑子、山本利江、青木好美、河部房子、高橋幸子、模擬患者への看護体験による看護学生の認識の発展、千葉大学看護学部紀要、26 巻、2003、63-67

⑤ 社本生衣、看護技術育成の向上を目指した基礎看護学演習の試み－模擬患者に教員を導入して－、看護学研究、3 巻、2011、59-67

⑥植村研一、Simulated Patient、医学教育、19、1998、218-221

⑦ 鈴木玲子、高橋博美、藤田智恵子、常盤文枝、山田晧子、成人看護学における対象理解を深める教育方法の検討－SP を取り入れたコミュニケーション授業の導入と展開、看護展望、28 巻 8 号、2003、46-52

⑧ 鈴木玲子、高橋博美、常盤文枝、他、コミュニケーション学習に SP(Simulated patient)を取り入れた教育技法の開発、埼玉県立大学紀要、14 巻、2002、19-26

⑨ 本田多美枝、上村明子、看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察－教育の特徴および効果,課題に着目して－、日本赤十字九州国際看護大学 IRR、７巻、2009、69-77

⑩ 和住淑子、山本利江、齊藤しのぶ、模擬患者への看護を初めて体験した初年次看護学生の体験内容と認識の特徴、千葉看護学会会誌、5 巻 2 号、1999、49-54

５．主な発表論文等

〔論文発表〕（計１件）

① 遠藤順子、澁谷恵子、菅原真優美,看護礎教育における模擬患者を活用した教育効果の検討－口腔ケア演習を通して(第 2 報)－、新潟青陵学会誌、査読有、第 5 巻第 3 号、2013、33-42

〔学会発表〕（計 5 件）

① 遠藤順子、澁谷恵子、 口腔ケア演習に模擬患者を活用した教育が看護学生に与える影響、第 34 回日本看護科学学会、平成 26 年 11 月 30 日、名古屋国際会議場（愛知県名古屋市熱田区）

② 遠藤順子、澁谷恵子，模擬患者を活用した看護教育に関する実態調査（第 3 報）－学生に焦点を当てて－、第 33 回日本看護科学学会、平成 25 年 12 月 6 日、大阪国際会議場（大坂府大坂市北区）

③ 遠藤順子、澁谷恵子,模擬患者を活用した看護教育に関する実態調査（第 2 報）－模擬患者に焦点を当てて－、第 44 回日本看護学会－看護教育－学術集会、平成 25 年 10 月 10 日、幕張メッセ（千葉県千葉市美浜区）

④ 遠藤順子、澁谷恵子、 模擬患者を活用した看護教育に関する実態調査（第 1 報）－教員に焦点を当てて－、第 44 回日本看護学会－看護教育－学術集会、平成 25 年 10 月 10 日、幕張メッセ（千葉県千葉市美浜区）

⑤ 遠藤順子、澁谷恵子、看護基礎教育にお

ける模擬患者を活用した教育効果の検討－口腔ケア演習を通して（第2報）、第32回日本看護科学学会、平成24年12月1日、東京国際フォーラム（東京都千代田区）

６．研究組織

(1)研究代表者

遠藤順子（ENDO,Junko）

東京工科大学・医療保健学部・講師

研究者番号：50433610

(2)研究分担者

澁谷恵子（SHIBUYA,Keiko）

東京工科大学・医療保健学部・教授

研究者番号： 50438074